

2020年12月

氷積の章

尾池和夫選

小鳥来る万円筆に足すインク
望の夜の杭に平家物語
をりからの雨意つれてくる昼の虫
ひるがへり合うて帰燕の日の近し
新豆腐しかと木綿の布目跡

霞袂集
友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
大島 幸男
原 稔

翮干す空に鳶みて猫が地に
鶇高音神宮林を続べにけり
暗算の得意なる子に木の実降る
手火熨斗に書く梶の葉の無の一字
躓きて深酒と知る夜半の月
虜囚の居る闇に蒸し藪置きしこと

氷凌集
余米 重則
岡橋 啓二
大口 彰子
松本 節子
重富 國宏
佐藤美智子

2020年11月

氷積の章

尾池和夫選

小鳥来る他郷と云ふも住み古りて
椅子はみな森へ向きたり今朝の秋
盆花や生者たがひに距離を置き
約束の場所はすぐそこ時計草
単線の脇まで寄せ来蕎麦の花

霞袂集
友永美代子
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

もう一つおまけの如く星流る
飛魚や地震に沈みし神の磐
梅を干す天神さんと同じ日に
七夕や小笹に願ひ重すぎて
宇宙人の水切り遊び星流る

氷凌集
余米 重則
岡橋 啓二
重富 國宏
吉田 恭子
伊藤 武敏

2020年10月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

郭公の遠鳴き牧を横切つて
片陰の尽きてぼつんと駅舎あり
田仕事に出はらふ里の立葵
泉にて憩へば波郷身に近し
客が来て土間の生簀の鰻裂く

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
原 稔

氷凌集

夕暮の風拾はむと江戸風鈴
道狭き昭和の団地蟬しぐれ
黒南風や浅間の微動レベル二に
虫送り火の粉渦なす千枚田
英吉利の漱石かくや梅雨の鬱

余米 重則
岡橋 啓二
伊藤 武敏
吉田 恭子
重富 國宏

2020年9月

氷積の章

尾池和夫選

七十五年祈りは尽きず沖縄忌
羽抜鳥軍靴の音が聞こゆるか
鴨川の流れ引き入れ藻刈舟
後脚に怯へを見せて鹿の子かな
九頭竜の水引く生簀鮎の宿

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
原 稔

廃仏の傷もつ羅漢走り梅雨
解く人のなき舳ひ舟南風吹く
焼夷弾降りきし空へ大花火
郭公の一声谷を深めけり
汗ばみし小銭差し出す心太

氷凌集

伊藤 武敏
余米 重則
重富 國宏
松本 節子
岡橋 啓二

2020年8月

氷積の章

尾池和夫選

永らへて故郷の新茶しみじみと
宇治川の流れ去なせる鮎の竿
薔薇の前この気後れは何ならむ
草の野を漕ぎゆく先の花檣

霞袂集

友永美代子
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

年縞の湖の主通し鴨

原 稔

氷凌集

小満やつながつてゐる椅子机
こだま瘦せ戻る立夏の奥秩父
対岸はアメリカ西部花水木
牡丹の揺れ通しなり出城址
天道虫飛び発つ翅を立てにけり

大口 彰子
伊藤 武敏
余米 重則
佐藤美智子
松本 節子

2020年7月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

一盞を褒めて下戸なり花月夜
嶺越しの風の明るき蕨摘み
流ると見えて澱の紅椿
根巻きせるものを後ろに苗木市
船小屋の網の繕ひいかのぼり

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
原 稔

氷凌集

どの像も髭を蓄へ風光る
植込みのこんなところに花通草
ふらこことや肩の力の抜き加減
初蝶や新生代の千葉時代（チバニアン）
生垣の高きにほのと花あけび

余米 重則
高橋キセ子
大口 彰子
伊藤 武敏
城島 千鶴

2020年6月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

宿に脱ぐあす峰入の藁草履
啓蟄や風去りてより星の出て
平凡な日々を綴れば風光る
浅瀬から覗く背鰭や水温む
町おこしの青年移住初つばめ

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

ものの芽のざわめく森の美術館
家ぢゆうの時計を伏せて春の夢

余米 重則
大口 彰子

春の川跨げば足るに石の橋
晴れてなほ人の恋しき雨水かな
磯の香を逃さぬやうに海苔炙る

伊藤 武敏
城島 千鶴
重富 國宏

2020年5月

氷積の章

尾池和夫選

御僧と向ひ合せの春火鉢
北東風や海へ出てゆく波がしら
春すでに水影草に日のこぼれ
猛る時もつとも美しき里神楽
春浅し竹屋の土間に縄の束

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一

梅が香や昔粉屋の水車みち
ひと袋とつくに空うよ雛あられ
簪を引つ詰め髪に春きざす
山稜は白きたてがみ山笑ふ
福州園孔子足下の蝶二頭

氷凌集

城島 千鶴
服部喜美子
宮城 節子
遠藤 長代
屋嘉比順子

2020年4月

氷積の章

尾池和夫選

この里の自慢の棚田初明り
初富士を過ぎ夕方の初比叡
適業は農業とあり初神籤
福笹や大和大路の往き戻り
原子炉の岬揺るがず鯰起し

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

溶解炉脇に小さき鏡餅
このまちのあの時の土水仙花
曇天の空を開きぬ寒椿
餓鬼大将に全勝したる喧嘩独楽
白川の浅きを歩む寒の鳥

伊藤 武敏
大口 彰子
吉田 恭子
重富 國宏
城島 千鶴

2020年3月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

頑固さが顔に出てゐる焼芋屋
かささぎの空巢に裸木の高さ
何待つとなくひとりみて霜の声
なにやらのいはくの札や銀杏散る
猪鍋や鴨居分厚き山の宿

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

落日や鯉跳ぶ音へ鳩の首
露座仏の膝に冬蝶石と化す
六屯の鐘撞き継いで去年今年
一撞きに萬を願ひ師走来る
冬銀河時間の糸をほどきけり

伊藤 武敏
余米 重則
四宮 陽一
吉田 恭子
大口 彰子

2020年2月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

神苑の木戸開いてゐる神の留守
先生の机に白き冬の薔薇
柩閉づるときさはさと菊香る
その底に小さき花あり枯葎
寄る歳に追ひつ追はれつ花八手

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

凧や軽くなりたる雑木山
散紅葉魔法の絨毯やも知れぬ
柿簾唱歌の里にゐるがごと
落葉掃の日課となりて老医かな
蔦枯るる煉瓦造の発電所

佐藤美智子
大口 彰子
伊藤 武敏
余米 重則
城島 千鶴

2020年1月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

山麓に艾草売る店鳥渡る

有岡 巧生

朝まだきコウヤマンネンゴケに露
萩の道この淋しさは何ならむ
沈む陽の透けて芒が原の路
野良仕事ひとつ終へれば秋深し

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

カンバスの白き地塗や割柘榴
内戦の深き弾痕秋暑し
樽柿や風はや光りだす会津
月を待つ蹲踞の水溢れしめ
日と風と適ひて茸干し上る

氷凌集
余米 重則
四宮 陽一
伊藤 武敏
吉田 恭子
佐藤美智子